

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830108

研究課題名（和文） 戦後から高度成長期における定時制高校の生徒文化に関する研究

研究課題名（英文） Study of Student Culture of Part-time Course in High School from The Reconstruction Period after World War II to The period of Economic High Growth in Japan

研究代表者

前田 崇（MAEDA TAKASHI）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：10507966

研究成果の概要（和文）：

本研究は、戦後から高度経済成長期における定時制高校の生徒文化の変容を明らかにしようとしたものである。研究対象とした定時制高校の学校文書を主な資料として、生徒文化に関する考察を行った。考察の結果と得られた知見は以下の通りである。

戦後の社会変動と教育変動に伴い、定時制高校の学校文化、生徒文化は大きく変容した。戦後の定時制高校における生徒文化の変容の要因に関しては、各時期によって異なり、教員文化の影響もみられたが、最も大きな要因は戦後の社会変動及び教育変動に伴う生徒の社会的属性の変化であった。

先行研究において、1950年代前半には、勤労青少年の大衆文化とエリートの教養主義には断絶がみられるとされていたが、本研究で得られた知見では、勤労青少年が通った定時制高校において、教養主義と大衆文化が混在しており、中間的な文化がみられた。したがって、本研究の事例に限れば、エリート文化と大衆文化は断絶しておらず、むしろ連続していたという結論が得られた。

本研究の意義に関しては、第一に、これまで研究の空白であった領域を開拓した点、第二に、事例研究ではあるが、先行研究で指摘された知見とは異なる新たな知見を得られた点で研究上の意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to clarify student culture of part-time course in high school from The Reconstruction Period after World War II to The period of Economic High Growth in Japan. Analyzing the historical texts of part-time course in high school, I studied the student culture of part-time course in high school. I got the following findings.

The student culture and school culture of part-time course in high school were changed drastically by social and educational changes in post-war Japan at macro-level. Factors at micro-level were effect of teacher's culture and change of property of students etc. Especially strong factor was the change of property of students.

Prior studies pointed out that the cultures of young people were divided in two cultures which were elite student culture "culturalism" and mass-culture of working young people. However there were mixed culture at the culture of student part-time course in high schools for working young people. In this case study, the cultures of young people in 1950's were not divided in two cultures.

This study is significance because this study got findings which were not studied in prior studies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	490,000	147,000	637,000
平成21年度	170,000	51,000	221,000
総計	660,000	198,000	858,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：定時制高校、勤労青少年、生徒文化、学校文化、教養主義、修養主義、歴史社会学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関する研究動向

教育社会学の領域では、いくつかの定時制高校に関する歴史社会学的・社会史的研究がなされている。片岡栄美によって、定時制高校に関する歴史社会学的研究が行なわれているが、生徒の階層移動の側面に力点がおかれており、生徒の社会化の側面や生徒文化についてはほとんど取り上げられていない(片岡栄美, 1993, 「戦後社会変動と定時制高校 - 都市型および農村型定時制高校の変容の比較 - 」関東学院大学人文科学研究所編『関東学院大学文学部紀要』第68号、関東学院大学人文学会)。また、渡辺潔による都立高校定時制課程の事例研究があり、生徒の実態と意識の変容について詳しく論じられているが、都立高校一校の事例研究であり、他の地域の定時制高校との比較検討はなされていない。(渡辺潔, 1992, 「定時制高校の変容と現状 - 都立F高等学校を事例として - 」門脇厚司、飯田浩之編『高等学校の社会史 - 新制高校の予期せぬ帰結』東信堂)。

日本教育史の領域における早い時期の歴史的研究として、尾形利雄・長田三男の研究がある(尾形利雄・長田三男, 1967, 『夜間中学・定時制高校の研究』校倉書房)。定時制高校制度が考察の中心であり、生徒の生活

実態や意識に関しては、1963年に行なわれた量的調査の結果を主な資料として用いているため、その他の時期については考察されていない。

また、定時制高校を取り上げた近年の歴史的研究として、板橋文夫・板橋孝幸『勤労青少年教育の終焉 - 学校教育と社会教育の狭間で - 』(随想舎, 2007年)をあげることができる。定時制高校の制度、教育課程、準義務化の歴史的意義、埼玉県のある定時制課程の成立過程が明らかにされており、成立過程に関する事例研究では分校に関しても考察されている。しかし、生徒の実態や生徒文化については、取り上げられていない。以上のように、先行研究において、定時制高校の生徒の社会化の側面や生徒文化に関して、歴史社会学的・歴史的に扱ったものはほとんどなく、十分な研究成果の積み重ねがあるとはいえない状況である。

(2) 着想に至った経緯

阪本博志によれば、近年の戦後日本の青年・若者文化に関する研究において、その研究対象は大学生などのエリート層が中心であるという(阪本博志, 2004, 「1950-60年代の勤労青少年に関する研究の現状と展望 - 大衆娯楽雑誌を手がかりにした研究に向けて」『京都社会学年報(12)』京都大学文学部

社会学研究室)。しかし、戦後のある時期まで、青年層のなかで勤労青少年こそが多数派だったのであり、戦後青年・若者文化史の全体像を把握する上で、勤労青少年は無視することのできない存在である。

周知のように、戦後に誕生した定時制高校は、勤労青少年を対象とした正規の学校教育機関である。定時制高校は、戦後のある時期まで、勤労青少年のための教育機関としては、最も多くの生徒数を有しており、戦後の勤労青少年文化の全体像を明らかにするためには、定時制高校における生徒の社会化および生徒文化を明らかにすることが必要不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、戦後から高度成長期の公立定時制高校（普通科）における生徒の社会化の側面に着目し、戦後から高度成長期の公立定時制高校（普通科）における生徒の社会的属性と生徒文化（生徒の行動様式や価値意識）の一端を明らかにすることを目的とする。

先行研究によれば、定時制高校は地域によって社会的機能や様相が異なり、都市型定時制高校、地方都市型定時制高校、農村型定時制高校の三類型に分類される。本研究においても、先行研究の分類を採用し、都市型、地方都市型、農村型という三つのタイプの公立定時制高校（普通科）を事例として取り上げ、各定時制高校の生徒文化（生徒の行動様式や価値意識）を明らかにする。

3. 分析の方法

分析の方法に関しては、各種の文書・資料に基づいた歴史社会的な実証研究の手法を用いた。具体的には、当時、実施された生徒の実態調査、意識調査などの調査結果を用いて、数量的な分析を行うとともに、公文書、学校要覧、学校新聞、生徒会誌などの資料を

用いて、質的な分析を行った。

4. 研究成果

戦後の社会変動と教育変動に伴い、定時制高校の学校文化、生徒文化は大きく変容した。先行研究において、定時制高校の発展形態や様相は地域によって異なることが指摘されており、都市型定時制高校、地方都市型定時制高校、農村型定時制高校に分類されていた。本研究では、先行研究で検討されていない地方都市型定時制高校を中心に研究を進め、都市型、農村型と比較検討しつつ、地方都市型定時制高校の生徒文化の特質を検討した。具体的には、生徒の意識、読書率、読書傾向、クラブ活動の動向、学校行事等を分析することによって、この時期の生徒文化を明らかにした。その結果、以下のような研究成果が得られた。

定時制高校が設置された直後の時期には、勤労青少年が通う定時制高校においても、戦後民主主義や戦後教育の理念を後ろ盾にして、生徒文化の中に教養主義の傾向が強かったが、その中は修養主義や大衆文化が混在しており、中間的な文化であった。都市型定時制高校に比べて、地方都市型定時制高校の生徒文化は教養主義的傾向が強かった。1955年頃までは、教養主義が強まる傾向がみられたが、その後、次第に後退していった。1965年前後まで、生徒文化の中に、教養主義や戦後教育の理念、社会改良主義が残存していたが、社会の安定化に伴い、教養主義や社会改良主義が衰退していった。他方で、努力主義は健在で、生徒の規範文化となっていた。

戦後の定時制高校における生徒文化の変容の要因に関しては、各時期によって異なり、教員文化の影響もみられたが、最も大きな要因は戦後の社会変動及び教育変動に伴う生徒の社会的属性の変化であった。

先行研究において、1950年代前半には、

勤労青少年の大衆文化とエリートの教養主義には断絶がみられるとされていたが、本研究で得られた知見では、勤労青少年が通った定時制高校において、教養主義と修養主義・大衆文化が混在しており、中間的な文化がみられた。したがって、本研究の事例に限れば、エリート文化と大衆文化は断絶しておらず、むしろ連続していたという結論が得られた。

本研究の意義としては、第一に、これまで研究の空白であった領域を開拓した点、第二に、事例研究ではあるが、先行研究で指摘された知見とは異なる新たな知見を得られた点で研究上の意義があると考えられる。

今後の課題として、第一に、全日制高校における学校文化・生徒文化を分析する必要がある。というのも、本研究の知見では、特に1950年代までの時期に、定時制高校は教養主義の普及装置の機能を持っていた。その際、高等学校の教員文化の影響が大きかったと考えられる。先行研究ではエリート大学における教養主義が研究の中心であるが、進学率からみても、教養主義の裾野を広げ、「中間文化」の形成に大きな役割を果たしたのは高等学校であったと考えられる。そのため、教養主義の普及という問題を明らかにするために、当時の高等学校における学校文化・生徒文化を明らかにすることが必要である。

第二に、定時制高校に通うことができなかった多くの勤労青少年の文化を分析する必要がある。この点に関しては、大衆雑誌や人生雑誌等の雑誌分析に基づく先行研究が存在するが、勤労青少年の生活世界と文化を明らかにするためには、雑誌分析とは異なる手法による勤労青少年文化の研究が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

前田崇「定時制高校に関する歴史的研究の歴史・現状・課題 - 定時制高校生の生徒文化に関する研究に向けて」『アジア文化研究』(国際アジア文化学会研究紀要)査読有、第16号、国際アジア文化学会、2009(平成21)年6月1日、91~103頁。

前田崇「戦後復興期から高度経済成長期の社会変動と定時制高校の社会的機能の変容 - 発展的₁地方都市型定時制高校を事例として -」『日本学習社会学会年報』査読有、第5号、日本学習社会学会、2009(平成21)年9月3日、103~113頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 崇 (Maeda Takashi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手
研究者番号：10507966